

アリストテレースの運動について (上)

小島 威彦

序

現象をその生成に沿うて始點より (*ἐξ ἀρχῆς*) 趁ひ究むるは最美しき理論であらう。¹⁾ 理論は何物かに關しての思惟の氣儘なからくりではない。それは與へられたるがまゝの存在の表象の組合せではなく、そのものうちに孕まれてあつたところの性格の必然的な發展でなければならぬ。なせなら存在する現實的なものは運動即ち完成された生成である。この Werden に於て成つたものは初め自分自身の内にもつてゐた現實性であるから。²⁾ こゝにいふ現實性は存在の本質としてそのものを性格づけてあるものである。存在の現實性或は形相はかくして生成の首めであることにも尾りである。理論とはそれゆゑに出發點としての形相より歸結としてのそれへの運動における形相の救出であるに他ならぬ。われわれは存在が自身の現實性を具體にする路にそふことを研究と呼ぶかぎり、理論もまた他のすべての存在と等しく自らの生長の過程をもつ。このゆへに始點 (*ἀρχή*) より原理 (*ἀρχή*)

(stages) への道を辿ることなくして結論のみをいぢぐる者は、その理論の形相をその個有性において捕へることから拒まれてあるであらう。それでわれわれは、存在がそれらの本性上あるべき象を調へゆく経過に正直でなければならぬ。このことは吾々に存在をその生成 (genesis) において考察すべく訴へる。かくのごとき路を逐次に歩む人こそ恒に美しき理論の友達でありうるであらう。今しかし、このために私はアリストテレスの哲學をその個有な始點より追究するのではなく、こゝでは寧ろ人間的存在一般の構造に對する解釋の原理を彼から聽かうとする。大袈裟な前觸はひとを滑稽がらせるものである。けれど少くとも學問はいかなるものであるかを私は彼に問はう。彼の謂ふ運動 (kinema) は學修に一の典型をもつからして、學問に對する問ひを吾々は先づ始めよう。このことは同時に彼の方法を見るに多く役立つから。あらゆる現實的なるものは生成したものである。それはこれらの始點よりしかくらの仕方での運動である。この言葉は彼の學問を例外することを最も欲しないであらう。では如何なる運動で彼の學問はあるのか。

彼の方法が感性的なるものゝ運動或は經驗の、單純な歴史を始點にもつことはケレスやパツカスなどのエレウシスの祕密とは全く別である。なせなら彼は感性

的經驗をも人間の活動への全視野をもつて位置づけようとした。思ふに對象の概念はその表象から出發する。思惟する精神はたゞ表象を通して、そしてそれと面接しつゝ認識に進みゆくから³⁾。ところで認識は本質の規定 (*επος τῆς οὐσίας*) である。こゝに救ひ出された本質は對象としてその表象のうち⁴⁾に在つたところの存在であるに違ひない。従て概念は對象への添物ではなく、むしろ正にそのうちに巢喰つてゐたところのものゝ自己實現でなければならぬ。このものを吾々は對象の性格と名づけたからには本質の規定は性格の顯現である。τὸ τί ἦν εἶναι (Das-was-war-Sein) はこゝにいふ性格へのアリストテレスからの贈名である。それは自分自身の具現に先立つて既にそこに在つた、そして自己の *παρουσία* (Anwesenheit) によつて甫めて現實的にそのものゝ性格として前面に現れ出る⁴⁾。したがつて表象と雖もそれが何物かの意識である限りそのものゝ性格を宿してゐる。それは便ち概念に對して、始點として可能的なるものである。認識はこの可能性においてあるところの表象の現實性である。この可能性より現實性への途上には、しかし多くのアポリアが横つてゐるであらう。その一つの困難の争奪によつて終點 (*τέλος*) としての認識への距離は一步短くされる。この闘ひの征服はつねに終點により近きものによつて

成遂げられるであらう。λογος(概念)は則ちその征服者である。ロゴスは困難と對質しながら終點に最寄のものとの對陣によつて形相を救ひ上る。一度は何ものかの概念としてあるロゴスもアポリアに出遭ふかざりは具體的な認識ではないであらう。發展の最後にいたつてロゴスも形相もテロスに於て在るもの(εντελέχεια)として安らふ。こゝに於てロゴスと形相とは等しく語られ認識は自らを具體することが出来る。

(1) Politic. 1252^a 24 Metaphysic. 983^a 24

(2) Hegel, Phänomenologie des Geistes; Vorrede S. 15

(3) Ibid. S. 72 及び Hegel, Encyclopaedie S. 31 参照

(4) G. Teichmüller; Aristotelische Forschungen III. S. 3—7

(5) λογοςは Wort に當るのであるがアリストテレースでは色々に使われている。ロゴスが logos であるといふことは後に明かにされるであらう。De Anima, 403^b 1 参照

さて、かくのごとき表象から概念へのフェノメノロギイは運動の何であるかをよく案内するであらう。運動はアリストテレースに従へば可能性と現實性との中間に於てある。この運動を通して存在は自らの本性の發展を遂げる。ところが本性(φύσις)は或る仕方では最初の基體的質料(πρώτη υλικήληθρον ύλη)である。¹⁾ 思ふに可能

性に於ては本性は質料のうちにある、質料なき本性は現實性にのみ屬するから。いま、質料なき本性はあたかも質料の否定であるかに見えるであらう。然しそれは消極的な否定ではなく、止揚におけるそれに當る。ひとは存在をその現實性のみに関して手探つても、たいそのものをそれとして提立するに止る。そのものゝ具體的なる把握はその履歴においてのみ可能である。そこには吾々が後に觀とらんとする質料と形相との辨證法的關係があるであらう。この關係において、はじめ質料として立てられた本性は具體的發展を完了する。この發展の窮極段階にいたつて、本性は最後のもの (Τέλος) 即ち εἶδος κατὰ τοῦ λόγου として語られる²⁾。かくの如き質料が自己の本性を實現しゆく運動を通してのみテロスは到達される。この過程はし加しながら順を遂ふて (ἐκ ἡποστάσεως) 進行されねばならぬ。質料と形相との相制し相剋つ雙關的展開の最高の順列において本質あるひは個有なるもの (τοῦ εἶδους) は顯現する。譬へば想つてみるがよい。人は社會に活動するだけの健康を養はねばならぬ。蓋し健康は人間の本性に屬する社會性を完うせんがためによき手助けであらうから。ケルト人が幼兒を寒さと貧しき布に馴らしたるは健康に資する踐實 (ὑποθέσις) として彼等の目的に、有效に報いたであらう。壯健と秩序、整へる軍隊と強き都市、こ

これらのものが幼き頃からの訓練に俟つてをひとは政治學書の處々に容易に聽くであらう。恰もこのやうにアリストテレースの哲學そのものが眞理を生む優れたる *Deapia* をいかにもたねばならなかつたか。アテナイの街々に惹起さるゝ事柄と物語り、こうした彼に迫りきたる限りに於いて存在するところのものと對決せんとする。併し存在は單純にはない。ドクサは存在するものすべてに關して在ると思はれる。³⁾ したがつて彼が存在把握にあたつて最初に相手ざるものは常にそのものに關する意見であつた。かくて、それらを先づその輪廓において畫き、その略圖を手懸りに一點々々の全體にもつ聯絡を精細に探りつゝ次第にそれら各々の具體的なる形を刻み上る。⁴⁾ この手續を眞理は最好んで要求するであらう。

(1) *Physica* 193^a, 28 ある仕方においては本性は質料としてであり、そこから運動が創まるもののとしてある (*Phy.* 195^a, 7)

(2) *Physica* 193^a 30. *トマデはむしろ Telo: として或は運動の原理としてある。* (*Phys.* 195^a 10) 何故なら終點に到着したもののものは運動の目的として質料を規定せるものであるから、*トマデは從て本性はテロスである* (*Politica* 1252^b 31

參照)

(3) *Ethica Nik.*, 1111^b 31

(4) *Ibid.* 1098^a 17

あるものゝ眞理はまづその見聞に負はねばならない。惟ふに、見ることゝ聞くことゝは生活の確保 (σωτηρία) のためだけではなく、よき生活のために思惟に參加するところの精神の根源的機能であるから。ところでこの二つのうち、必要に關して即ちそれ自體によつて、より力強いものは視覺である。しかし直觀的思惟に關して即ち附帶的には聽覺である。聽覺は本來たゞ音 (ἦχος) の區別を、若干の動物にあつては聲 (φωνή) のそれをのみ感知する。併しながら附帶的に、このものゝ大部は思惟に合流する。何故かなら言葉 (λόγος) は聽かれるものなるがゆゑに、それ自體によつてはならないが附帶的に學修の原因であるから。蓋し言葉は名 (ὄνομα) から合流されてあり、名の個々はなにもものかの表現 (συμβολή) である。それだから、これら感知のいづれかゝ生れながらに奪はれてある者のうちでは盲人は聾と啞の人々よりも思惟的である。¹⁾ 言葉がかような性格をもつことに、吾々はアリストテレスが意見 (ᾠσιον) の形式をとるところの一般的なロゴスから研究を出發する必然性をよむ。言葉はかく存在の標であるがゆゑに、ひとは存在を捕へることが出来る。さらにわれわれが、存在が自らの形相を露はせる路に沿ひうるもまた一に言葉がかくも思惟と近かしい關係に立つことに懸かる。こゝでひとは存在とロゴスとの何であるかを

なほ問ひ詰めるであらう。いまはしかし、この問題から側見しながらわれわれは先きを急がねばならない。吾々の研究は、存在が自らを何物かとして示せる道を跡づけることにあつた。研究はすなはち、存在の形相の發展史であるに外ならぬ。この發展史の流れに棹さすことこそ方法である。ところで存在の性格の展開は右に見たごとく質料と形相との辨證法的關係に於てある。従てロゴス(概念)を知らずし質料にてのみ關して語る人にあるひはまたディオゴスのみに考察を與ふる人にてはなく、存在はむしろ兩者から定義する人に自らの個性を見せるであらう。²⁾眞理を愛する人はそれゆゑに兩者の雙關係を手繰るは必然である。吾々の運動はかくのごとき質料と形相との辨證法的發展を意味する。われわれはこゝにいふ辨證法が可能性と現實性との關係に外ならぬことを次第にみるであらう。アリストテレスの學が一の辨證法的なる運動であると同じくわれわれの一字から一字へも終點への段階を踏み登るそれである。この可能性より現實性への運動において、われわれの文化の歴史と生活、すべての存在の必然的な姿をみる。私は暫くこの簡単な言草のためにまた運動の過程に身をおくであらう。

(1) Parva Nuntia 436b 18-437a 17

アリストテレスの運動について

(2) De anima 403^b 7

一

學問は生活を越えて彼岸にさく華ではない。この平凡な眞理は競技場にいれられた馬のやうに、いかにばたついても動きのとれない思想であるかに見える。おそらく、このことはひとたび到底起えがたい精密な限界に達した思想の運命である。あまりに白日のもとにおかれたものは卻て路傍の草として人々の注視を誘はないであらう。しかし學問することも一つの生活であるかぎり私はむしろこの平凡なものと話合つてみなければならぬ。日常の生活を支配し實踐の一々を規定せるものうちに身を沈め、それが搬べる存在の本質を、學問は攫み出す。ひとたび存在の本質を把握するや、その概念は存在に對して自らを指導者として振舞ふであらう。かくして概念の飽和は始まる。概念が新たなアポリアのゆゑに自己否定の運命に邂逅するは爰に於てある。否定は運動するものゝ必然的な契機である。則ちロゴスは存在とのダイアレクチックのもとにおかれてあるであらう。曾ては人々の意見から發展したる學問は逆に人々の生活態度を支配するに至る。このゆゑに學問は恒に生活と共に動くべく強ひられる。いまドクサが研究の魁けとしてあるから

にはわれわれはそれを第一に尋ねることは至當であるであらう。惟ふにひとはドクサによつて行爲することく、それから學問する。なせならひとは不確と思ふものを意見として持し得ない以上ドクサは確信 (ἐπιστήμη) を伴ひもつ¹⁾。従てそれは存在の把握として自らを確信せるがゆゑにそれから研究が踏出さるべきは必然であるから。吾々はまづ人々の一般の意見から話しだそう。この言葉は恰かもアリストテレスの愛人であるかにつねに彼を離れない。彼の思索の始點をなせるものは人々の考へ (συνήψεις) と人々の見聞する事實 (τὰ φαινόμενα) であつた²⁾。ところが普通ドクサは領域を實踐に限られてある。たとへば、ひとは太陽が直徑における運動をもつとか、今日は雨がふるであらうと思ふ (δοξάζω)。そしてそれに據つて行爲の對象と交渉し實踐的決定を爲すであらう³⁾。アリストテレスは併しながら *doxastikē* (*δόξα*) の意味を、永久的必然的なものを處理するやうな認識能力のあらゆる活動にまで擴大する。ではいまやわれわれはドクサを上組してその個有な性格をさらけ出さう。

意見は第一に、常に眞であるか偽である⁴⁾。そしてそれはしかじかであるといふ確信をもつてゐる。然しそれは意識的に結果されたものでもなく、またつねに必然的に理由が附加されねばならぬものでもない。すなはち第三に、意見は感知 (*αἰσθησις*)

の領域に關するものである。⁵⁾なせなら意見は研究(επιστήμη)ではなく寧ろ何かの表示(φαῖσος)であるから。⁶⁾このゆゑに意見は立言の形式をもつところの認識過程の結果である。隨て意見は最後にλογοςである。われ／＼はこのことをアリストテレス自身をして語らしめよう。あらゆる意見には確信が伴つてゐるが、ひとは獲得された斷定を信じてゐるのである。ところがその斷定はロゴスである。⁷⁾ひとはいかなる意見をも、それが確信であるからには理由なしにはもたぬであらう。假令その理由が糺されなくとも、われわれはそれが理由なしには話されてはゐないことを知つてゐる。何故ならそれは經驗から贏ちえられたものなるゆゑ、正當な見透しをもつてあらうから。⁸⁾さてかくて、意見はつねに理由(λογος)に根ざしてゐるから、こゝにその確立(ἐπιπέδου)に先立つて研究の過程が前提されるのである。意見を有つ能力(δύναμις)と理由を讀む能力(λογιστική)とが事實上一にして同じいものなるは正にこの故である。前者は結果を、後者は過程を、目指すものであるといへる。研究の結果もまた一のὄγκοςであるかぎり、二者の特質を能力の差異に求むることはむしろ滑稽であるであらう。さてわれわれはこゝでは意見の性格をつきとめることによつて研究が意見を始點にもつ必然性を掴み出さんとした。上によつて意見はロゴ

スど不離の關係にある。而るにロゴスは存在の標であるかぎり、それは何物かを物語つてゐる。ある存在を把握せんとするにあたつて、もしそのものが自らを何物かとして物語つてはゐないならば、われわれはそのものゝ内へ入りこむ緒口を見出すことは不可能である。このゆゑにあるものゝ研究がそのものに關する意見から始められるは偶然ではないであらう。

- (1) De Anima, 428^a, 20
 (2) Ed. von Hartmann; Geschichte der Metaphysik, I, S. 45 參照。 Ethica Nico. 1098^b 4
 (3) Rhetorica. 1377^b 18
 (4) Ethica Nico. 1111^b 32
 (5) De Anima 438^a 26
 ながまつさに關する研究は——G. Teichmüller; Neue Studien zur Geschichte der Begriffe. III. Die Praktische Vernunft bei Aristoteles. S. 179—186——更に *δύναμις* の關係に關するは——J. Geysar; Die Erkenntnistheorie des Aristoteles. S. 181—187——參照
 (6) Ethica Nico. 1142^b 13
 (7) De Anima. 428^a 32
 (8) Ethica Nico. 1143^b 13

論究の始點は右様にして、物語られてあるものゝうちに潜むアポリアに關して

あること¹⁾は明かである。アリストテレースが當時の人々の生活を導ける一般的なロゴスに含まれるものをとりきたり、これを検討しながら自己のイデーを具體的な形に高めんとする企てを、われわれは彼のどの書に於てもはいちはやく観取ることが出来る。私はこゝに彼自身の言葉をその引合ひの一つに出すであらう。吾々に先んづる人々の意見を、彼等が同じ對象について何物かを物語つたかぎり、吾々が彼等が正しく説きたるものを捕へ、之に反して正しからざる何かがあるならばこれに注意深くあらんがために、共に採入れなければならぬ²⁾。このやうに研究の始點を形作る意見をして事實と對質せしめつゝ解釋の原理(*ἡ ἀρχὴ τῆς ἐπιπέσεως*)は自らを發展する。それゆゑ意見と常識は事實と俱に真理の契機となるものである。総合的な真理はこれらを通して完うされる。真理も、現實性において在るものゝ總てとひとしく、可能性において在るものより出發する。蓋しあらゆる現實的なるものは歴史を藏してゐるであらう。このゆゑにあるものゝ真理は、それがいかなる可能的なるものよりの追跡によつてのみ基礎付けせられる。われわれはアリストテレースの哲學において、その個有な性格の發展の首途を、ドクサに見出した。彼にとつては意見は可能性における真理である。彼の哲學は自らの現實性の身仕度をこゝよりの道

程において整へんとする。この際、現實性は彼の哲學の特自な發展を意味する。現實性は然しすべて同じくは語られない。或るときは、可能性との關係における運動として、また他のときは、質料との關係における本性としてである。³⁾ われわれがいま發展といへるは前者の廣い意味においてある。學問の體系は運動としての現實性であるといへるであらう。その始點をわれわれは右に、いくらか明かにしようとしてきた。しかしながら以上の運動概念はアリストテレースの存在學における性格の話手として殆ど他人であるにすぎぬであらう。こゝで *ἔστιν* (存在) と *ἔστιν* との關係に對する考察に時を籍さねばならない。

(1) *Physica* 253^a 22

(2) *De Anima* 403^b 20

(3) *Metaphysica* 1048^b 6

本性上知ることを欲する人間の希求はひとびとを、その解決を迫るあらゆる存在の本性の把握にまで、ひき摺りゆくであらう。私はいまわれわれに縁多きことがらについて考へてみる。私は友人をもつ。彼がどんな人であるかにまづ興惹かれる。彼は甲として、乙として或は丙としての符號をもつて人々の間にかつがれてゆ

く。それと同じだけ多くの概念を私のところへ運んでくる。私はそのうちに彼をAとしてよそ／＼しきなしに憂鬱を語り世間を話するにいたるであらう。然しまたBとは學問をのみ議論し、Cとは幸福を夢みるであらう。彼の性格を握りしめるまで私はそは、ついてある。それと同時に彼の性格は私のつきあひ方をAとして或ひはBとして規定する。惟ふに性格は現實性において在るところのものに最も屬するからであらう。本體の把握もまた、その特自な道をもつ。存在は現象としてわれわれの前に自らを *geben* するかぎり、そのものゝみが宿す意味を暗示し、その個有なるものゝ確立をわれわれの課題として取残す。ところでわれわれは存在の側から語るべきである。在存は何物かとしての形相であるであらう。この形相はロゴスとの双關々係において、自分自身のうちに在つたところの本質的なもの (*ti sy eina*) へ展開する。ひとはこの展開をロゴスの限定 (*opoiōsis*) とよぶ。今いま吾々は再びもとに還らう。ロゴスの限定にまで齋さんとする要望は人間の運命に根をおろすであらう。この運命はロゴスの嚴精な規定に堪へる *hē ēnē eina* の捕捉において初めて満足する。このことは本質がロゴスの規定をうくべき性格をもつがゆゑである。かくして論究は本質をめがける。この運動すなはち存在とロゴスと

の動的關係は本質の救出において終止する。從て現實性からは本質或は形相はロゴスと同じき場所に位する。ロゴスは單純に主觀性においてのみ浮動するものではなく、却つて存在から動き、そのものゝ本質へ入り込むであらう。なせなら、ロゴスがもし存在するであらうならば、それは必ずある特定の質料のうち¹⁾に在ることは必然であるから。ロゴスはかように質料と共にあるが故に、それは附帶的なるものを説明しえざる詭辨學者の空虚な縷述であらうはずはない。¹⁾ロゴスと質料とはより高き形相の楷梯へ漸次に上りゆく發展の契機である。この最後の楷梯を踏み盡したるものを本質と名付けることが出來よう。本質とは則ち具體的なロゴスの他ではない。このゆるゑにロゴスと質料とは相俟つて具體者——吾々はこれを運動の現實性とよぶのであるが——への道を歩みつけねばならない。ところで存在が自己の本質へ展開する運動を跡づける方法 (*methodos*) について、われわれはこゝでアリステテレスに問ふべきである。彼にしたがへば、學問は存在の本質、原理に關するものである。然し本質について或る確信を把ふるは最困難なことに屬するであらう。²⁾本質へ通ずる路を彼はわれわれに手近な存在自身のうちに發見した。このために先づ、現象の諸形態に穿鑿の鉞はぶちこまれねばならない。こゝに唯一つの方

法がある。それは實に分析的方法に外ならぬ。この方法は直接な所與としての合一者 (συνολον) の根柢にまで掘りさげ、そのものを構成してきたつた質料と形相との雙關的展開過程を追驅ける。かくして構成要素の關係を許かんとする彼の分析は單なる部分への分解ではない。反て現象からそのものゝ本質へ、事實から原因への展開である。彼が存在そのもの (οὐκ ἔστιν) に附帶的なものについての證明の仕方³⁾といへるは普遍的なものより個々のものへの適用であり、それ自體に依て在るものゝ附帶的に在るものに對してもつ必然的な意味の樹立である。されば事實を説明しえざる原理は一面的な從て抽象的な真理であるにすぎぬ。アリストテレスが屢々彼以前の哲學を批評するにあつて用ひた不可能 (ἀδύνατον) なる言葉はつねに事實との照合に基礎をおき、彼等の事例を抱擁しえざる原理の無力を曝露せんがためであつた。彼の綜合は正しく原理自身の具體的擴大であり、本質自身の進展に他ならぬ⁴⁾。この分析と綜合が眞理を織りゆくよき範例を想起すは困難ではないであらう。存在の展開契機を攫み出す。それが彼の分析であつた。このことは存在をそのの始點より顯はにせんとする理論をして分析的方法との握手を餘儀なくする。思ふに μέθοδος は存在の展開の路を跡づけることである。從て吾々のいふ分析的方法こ

そ存在の本質への道しるべである。このことの範例の一を私は政治學書にみる。全體をその構成部分へ分析する彼の方法は、社會に存在する様態のすべて、人と家と村の或は幸福と正義の本體への道 (δὸς ἐς οὐρά) を辿る。かくて社會への連關における把握を可能ならしめる。⁵⁾ — この際、本體とは生活の現實性としての社會的生活を意味する。 — この分析は手取りばやい結論の愛好者とは馴染まない。つねに存在のまへに佇み、そのものゝ語らひにそふものにのみ、眞理の忠實な侍女であるであらう。それゆゑあるひとは、學問は絶對的原理 (ἀρχὴ ἁπλοῦς) への到達をめがける限り、分析をたゞ一の *τέχνη* として片附ける。⁶⁾ 然しテクネーであるといふことはアリストテレースの全勞作を貫く分析が存在把握に必然的な道であること、この邪魔にはならない。ところで、分析が直ちに存在把握の必然的な道でありうるのか。吾々はこゝで一つのアポリアに出遭はねばならない。

(1) De Anima 403^b 2, 403^a 1

(2) Ibid. 402^a 10 Metaph. 982^a 1

(3) De Anima 402^a 13—15 參照

(4) Metaph. 1079^b — 1080^a エタモラス學派の構成的方法ミソクラテスの歸納的方法、及びプラトーンの演繹的方法の批評。

この場所で事實と人々の思想との組合せを通じて、アリストテレースが原理自身の擴大につまめた跡をたやすくみつけろ

ことが出来る。

(5) *Politica* 1256a 3-1257a 12. 1260^b 13 參照

(6) W. Jaeger: *Aristoteles*, S. 395—369^b 「論理學は、存在の學ではなく從て哲學ならざる修辭學と、その運命を共にする」¹⁾。オ
ルガノンとメタフィジカとの間の越え難き溝渠は、此のごとく、存在とロゴスを分離して考ふるアリストテレス學者
につきものである。彼等に從ふなら、定義は *Dis-ens-est-ens* に關するものであるといふことは空虚な言葉になるであ
らう。なぜなら現實性における本質は具體的なロゴスでなければならぬから。

上において吾々はロゴスによる判別 (*epibaneu logos*) が同時に存在の展開であること
を當然であるかにゆるしてきた。分析と存在把握との關係も亦この默認の上でと
かれた。しかし私は意見の構造に對する問ひにおいて、いくらか答へをほのめかし
得たかとおもふ。ロゴスが存在の救出者であるためには、存在はロゴスによつて救
はるべくなければならぬ。もし存在がロゴスと特殊な關係にあるのでなければ論
究は徒勞に終るのみではなく、全く不可能であるであらう。では存在とは如何なる
ものであるか。私は暫らくアリストテレスに尋ねよう。彼に據れば、存在とは最
普遍的な概念である。¹⁾ それは本體 (*ousia* すなはち *ousia*) だとせば、或る馬である、ある
ひはまたそのものに附帶的に在るもの (*synhycheta*) である。²⁾ されば存在とは何
等か感知 (*aiodiotau*) されうべきものを意味する。それはわれわれの言葉 (*logos*) に盛

られ、あれとして、これとして人々の間に通用する *επιπέδη* である。³⁾ 論究が存在自身の発展に沿ひうるには、存在は先づ自らを自らに於て示してゐるもの、なければならぬ。存在は自己を示してゐるものであるから、吾々はそれをしかくのものとして、それから跡付けて燎かにする (*ἀποφανέσθαι*) ことが出来る。すなはち存在は *φανόμενον* となければならない。⁴⁾ ひとびとの見るものは光のもとにおかれたもの即ち *εἶδος* である。したがつて言葉に表現されうべき凡てのものである。 *φανόμενα* は未だ嚴正な規定をうけざるものであるにせよ、何物かとして人々の間にもち搬ばれるかぎり既に、言葉に伴はれてある。もしも存在が言葉と縁無きものであるならば、大工は地に鍊瓦を置並べ、截られたる材木をその上に建てないであらう。大理石は像への質料として自らを物語つてゐないならば、彫刻家の鑿はそれに向て動かされないであらう。已に質料と語る以上現實性の想定の後、に許さるべきものではあらうが、存在は第一の意味において (*πρὸς τὸν αὐτόν*) 自己を何物かとして指示してゐなければならぬ。技術と論究、すべての實踐の可能性は、存在のかくの如き性質においてある。存在はこのように α として β として言葉をつれ添ひ、言葉は存在と共にある。おのおのの言葉は従てある存在を指示してゐなければならぬ。則ちロゴスの展開が存在のそれであ

るべきもこのゆるぎである。吾々にとつて存在せる世界の一つ一つは言葉に表現さるべくあらねばならぬ。この確信は——無意識にはあつたとしても——アリストテレスの存在學の全版圖を支配する。⁶⁾ われわれが存在への通路をもちうるのは存在がかように常にロゴスと共にあることに據る。茲に吾々は生活において經驗するところのものゝ本質を把握する可能性を理解する。存在が全く手懸りのないものであるなら、文化の歴史が今もわれわれの世界に生きてゐることは、猿が人間に成つたことよりも不思議である。なせならダーウインが正しき結論を把へてゐるならば猿は人間になるべくあつたであらうから。われわれの世界において技術と學問等々がある限り、自然はわれわれのものに成るべき性質をもつてゐなければならぬ。われわれの世界は自然に依て規定されどゝもに更に自然を規定する。このことは蓋し存在とロゴスとの右に見たごとき根源的な性格に負ふであらう。いまは、しかしこれらのことが學問の發展の道順について、いくらかでも役立てばよい。吾々は上でロゴスが存在の形相であることをみた。ある表象ある言葉はあるものゝ象に關して在る。ひとはこの象 (eidōs) から審議するにつれて本質としての形相 (eidōs) を救出する。終りとしての形相は初めとしての形相の發展である。この

ゆるに形相は首め (*ἀρχή*) であるとともに尾 (*τέλος*) である。ところが形相がロゴスであるならば存在の發展は同時にロゴスの歴史でなければならぬ。存在 (*ἔσθι*) より出で、その絶對的なるもの (*ἀπλῶς οὐ*) の規定に終るアリストテレースの哲學において吾々の全視野をみたまは實に存在とロゴスとが絡みあひつゝ、より具體的なロゴスに高まりゆく發展である。この行程の足跡に吾々は分析的穿鑿の針路をみつげることが出来る。なせなら、存在は自らの形相をロゴスとの動的關係において顯はにする。その關係を辿ることに吾々は方法の根源的な意味を發見した。そして分析的方法は存在とロゴスとの雙關的規定關係の個所々々を引摺りだすものとして、とりたてられた。この意味において分析的方法は存在の發展史の跡付けであり研究の最仲よき伴侶である。

- (1) *Metaph.* 1053^b, 20 1001^a, 21
- (2) *Metaph.* 1028^e 10. 1045^b 33
- (3) O. Apelt; *Beiträge zur Geschichte der griechischen Philosophie*, S. 112 註1、參照
- (4) M. Heidegger; *Sein und Zeit*, S. 28. *Der Begriff des Phänomens*, S. 32 *Der Begriff des Logos*. 參照
- (5) W. Schuppe; *Die aristotelischen Kategorien*, S. 14, S. 67. 參照

吾々は以上で方法が存在自身の構造のうちにあることをみた。それゆる同じい分析的方法にしるすでに方法が存在の展開の尾行であるかぎり、存在の展開の仕方

によつてそれぞれ規定さるべきは必然である。ところで個々のものに關する經驗的知識から普遍的なるものへ、すなはち單純な歴史の資格において存るものから出發して、そのものゝ具體的な歴史を展げる。この處置は、ひとしほアリストテレースの哲學の壓倒的な方法である。蓋しこのことは彼を、存在の展開に對する正直な觀想を最貴き生活としたアテナイ人の優れた代辨者として、最よく物語るであらう。具體的普遍なるものはそれぞれの存在の終點 (τέλος) として、それぞれの個有な歴史をもつ。この歴史への門は、これ、あれとして在る *quantitativum* である。このものはヘーゲルの所謂單純な歴史に外ならぬであらう。われわれに最知られたるものより出發して原理は考究さるべきは瞭かである。原素と原理は *πρωτογενέρον* (最熟知されたもの) の展開の後にはじめて救ひ出されて *πρωτογενέστατον* とは成る。¹⁾ アリストテレースにとつては學問は畢竟、われわれに熟知されたるもの (*πρωτογενέστατον*) より絶對的に認識されたるもの (*πρωτογενέστατος*) への運動である。²⁾ このゆるぎに感性的なものは可能的な認識として、人々の意見は綜合的な真理の契機として、自らの役割をもつ。彼の哲學の任務はしたがつて常識の姿においてある存在を絶對的な形に救上げる、すなはち歴史において存在する真理を綜合し統一するところにある。意見とその形式における

蓋然的な證明は、それゆゑ彼の歸納の礎石である。この自覺に立つて、様々の粧ひのうち、に搖めく表象をあらゆる側面から比較し、それらに確かな足場を築かんとしたソオラテエスの辨證法的處置は、一層の光輝をもつてアリストテレースをして曠く裕かな體系の樹立を可能ならしめた。³⁾ 部分として歴史において存在する眞理は彼の體系への可能性であつた。それは全體或は現實性への可能を自らのうちに所有するところの可能的に在るもの (*ἄντικειν ὄν*) である。彼に傳へられ見られる存在はロゴスと共に、さらに具體的にいはゞ、それぞれの概念を背負つて、吟味せらるべく、具體的把握にまで發展せらるべく彼に肉迫する。それらのものは彼の哲學における質料としての始點 (*ἀρχὴ ὡς ἀνάγκη*) であるといへよう。それは運動の終點にいたつて *ἀρχὴ ὑπὸ τῶν ἀνάγκων* として自らの本性上の姿を露はすであらう。彼はかくのごとき可能性における學問より現實性における學問への運動の流れにそふて眞理の完成を企てる。 *ἐπισημαίνου* の風采をもつて現はれる現實的な認識もその故里を *ἀποπαύου* の姿のまゝ、廻ふ可能的な認識にもつであらう。そこは經驗的知識であり意見であり常識である。生長せるものゝ經歷をその故郷より讀まんとする彼の關心は従て、われわれに最知られたる手近な存在からそのものゝ *ὑπὸ τῶν ἀνάγκων ἀρχὴ* への旅に強ひられる。この行

はおそらく平坦ではないであらう。數多き紛糾と困難とに對質しつゝ本性は贏ち得られる。この本性への運動において存在を眺めんとすることこそアリストテレスの學問の望みうる權利である。彼のこの方法を置去りにして彼の哲學の頂點を飾る多くの美しき知慧を配列することは殆ど無益なことではあるであらう。惟ふにあらゆる存在は可能性において在るか現實性において在るかその何れかである。そしてこの兩者の關係が彼の存在解釋に於て最重大な特質を形作れるかぎり彼の體系は同時にまたキネシスの體系でもあるから。(未完)

- (1) *Physica* 184^a 21
 (2) *Eth. Nic.* 1095^b 3 參照
 (3) *Ed. Zeller; Philosophie der Griechen* II. 2. Abt. S. 169—170 參照
 (4) 私に、アリストテレスの存在の分類について言断られなければならない。
Metaph. Δ. 7. E. 2. 9. 10 ETC. における分類を擧げると次の如くである。
 一、附帶的に在るもの、二、それ自體によつて在るもの、すなはちカテゴリアの諸形態、三、眞としての在るものおよび偽としての在るもの。
 以上のほか更に可能的ならびに現實的に在るものを數へてゐる。
 かつ、私が私は *O. Apelt* の解釋に立ち登られる——*Aristoteles' Kategorienlehre*. S. 113. 參照——、彼に據る *Metaph.* 1017^b 1 及び *Metaph.* 1051^a 34 に於ける *το τωον* を *κατηγορία* に懸るものとして、可能性における存在はカテゴリアの存在に列する。然し私は存在の分類がカテゴリアの存在を現實性および可能性における存在との二つの見地より作されたことを明瞭に讀むことが出来る。——*Metaph.* 1046^b 32, 1026^b 1 參照——。處々においてアリストテレスはアヘルトを戸迷ひさせてゐる。あらゆる存在をその運動において解明せるアリストテレスが存在を可能性において在るものと現實性において在るものとの二つに分類せる個有な仕方をも排けなないであらう。
- (5) *A. Schweigler; Geschicht der Philosophie*. S. 102 參照